

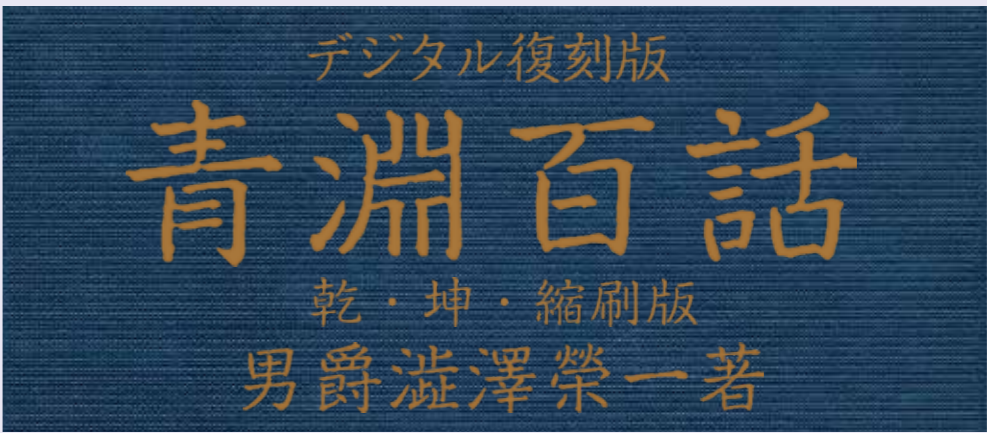
＜お勧めします＞

経済史・経営史・近代史研究者／大学図書館／公共図書館／企業内図書館



KinoDenは、紀伊國屋書店が提供する学術和書電子図書館サービスです。読みやすいビューア、未購入タイトルも含めた全文検索、試し読み・リクエスト機能など、長年の経験を活かし「本当に使われる電子図書館」をご提供致します。

道義観、道德観、倫理観と経済を一致させる「道德経済合一」の考えを主張し続けた経営哲学——これから先どうすべきかと思ひ悩む人々に、貴重な示唆を与えてくれる渋沢栄一の言葉を復刻！



No.KS0000509



大正二年七月十八日発行 明治四十五年臯月端午発行／菊判

叙  
盛年不重来、一日難再晨とは、陶  
るものにして、事多歳月促とは、杜  
る所なり。されば余は、邦家の大  
れ、開國攘夷、黨同伐異の際に成長  
半筋に従事し、稍々讀書の趣味を  
知るに及び、慨然鞏錫を抛ち、書劍  
浪し、遂に知己に感じて、揚を名門  
はるゝの時に於て、時勢忽ち一轉  
や維新の昭代に遭遇し、愾て職に  
も、官務は余の本意にあらざるを、  
を商工業者の位地の進歩と、其事  
夜以て日に繼ぎ、老の既に至るを、  
今其既往の徑路を回想すれば、  
圃あり、林壑あり、原野あり、萬里浩洋の水程あり、帆檣林  
立の港灣あり、春和景明怡然として喜ぶべきものあり、  
寒烟蕭雨悽然として悲むべきものあり。光景の變ず  
る處感慨之に伴ふは、人情の應に然るべきものなり。  
古人言あり、干戈を視れば則闘を思ひ、刀鋸を視れば則  
懼を思ひ、廟社を視れば則敬を思ひ、第家を視れば則安

青淵百話 男爵 澁澤栄一著  
一天命論  
一體斯ういふ問題に對して自分は口を開き資格を持たない。『天てか』  
とかいふ哲理的な問題は、一應の學者ですら其の説明を困難とする所であるのに、  
自分の如き實業界の人物で、固も哲學などは極めて縁の遠い者に何で満足な解  
決が與へられよう。併し實業界に踏を踏いてある身だから、そんな問題は一切知  
らぬといふ程に哲學を嫌ふ自分でも無い積り、時には命が淺薄なる學問と知識と  
を基礎として、熱慮探究を試みたこともある。故に學者ならぬ余が『天命論』も時に  
取つての御座ると見て貰ひ度い。  
一天命論  
「天に就いては古來支那人が論じもし且は崇敬もして來た所の事情で之を西洋  
で云へば造物主の如きものであらう。之と完まれる形は無いけれども、一つの靈  
が有る。世に革命といふ言葉があるが、是は天の命が革るといふ意義である。例  
へば殷湯周武の如き聖王が世に現はれ、麻の如く亂れた社會を治めて自ら天下の  
蒼生を率ゐる生殺與奪の權を一手に握るといふが如きもので、之を要するに天の命  
する所に從つて福禍の世を革め直す謂である。而して革命の語も此處に起原  
したといふが、想ふに天は靈のみだから言はんと言ふことが出来ず、行はん  
と欲するも行ふことが出来ないので、其處で聖主賢君に命じ代りて言はしめ代り  
て行はしめるのである。  
孔子の天に對する觀念は如何であつたかといふに、論語や中庸の中に散見して  
居る所を通じて之を窺ふことが出来る。『天を恐みず、人を尤めず、下學して上達す  
我を知る者は其れ天か』と云ひ、或は『天徳を予に生ず、桓桓其れ予を如何せん』と云ひ  
或は『天を言はんや、四時行はれ、百物生ず、天何をか言はんや、なぞ』と天に關して  
は、澤山に述べてあるが、畢竟天は公正無私にして、絶大無邊の力を持つもので人は

販売価格のご案内

132,000円（本体価格）分売不可・同時1アクセス



〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-41  
TEL : 03-3294-1801 FAX : 03-3294-1807  
URL : http://www.dobunkan.co.jp/  
E-mail : info@dobunkan.co.jp  
お問い合わせは、上記TEL、FAX、またはメールアドレスまでお願いします。



取扱店

デジタル情報営業部  
TEL:03-6910-0518 FAX:03-6420-1359  
〒153-8504 東京都目黒区下目黒 3-7-10  
ict\_ebook@kinokuniya.co.jp

青淵百話について

『青淵百話』は、渋沢栄一が人が生きていく上での術や正しい道筋、道德観、人に対するの思いを滔々と語った、これから先どうすべきかと思ひ悩む人々に貴重な示唆を与えてくれる百の談話集である。  
『青淵百話 乾・坤』は 1912年6月26日に初版を刊行、当時の広告記事から8版まで版を重ねていることがわかっているが、刷数は不明。同縮刷版は 1913年7月に刊行、1913年8月に三版と、わずかひと月で版を重ねたことがうかがえる。なお、刊行にあたっては、同文館出版の社員であった井口正之氏が深谷の渋沢邸に通つて口述を書き起こし、これに渋沢氏が加筆・修正を加えて原稿になったとされている。



# 人が生きていくうえでの術や正しい道筋、道徳観、人に対しての思いを滔々と語る！

## 「解題に代えて ——井上 潤（渋沢史料館館長）」より抜粋

渋沢栄一の言葉は今の時代に十分通用する、むしろ当時の行動、言葉が今、より強い光を発して我々に考えを伝えてくれる、また、それを理解させてくれるような人物として取り上げられているようにも思います。

今、大河ドラマを見ている方々は、単なるドラマとしてではなく、毎回の放送の中で、渋沢栄一から何かしら学べるものがあるかもしれない、そんな目で見ている人が多いと、感想めいたものが耳に入ってきています。「正しい道筋の利益を求め」「私より公の利益を大事にする」といった主たる考えがあって、「積極的にことにあたる」ことを勧めています。お膳立てされたものに淡々と導かれるままに動くのではなく、より一層おいしいものとして食べるには、自ら箸を取って一歩先んじてことにあたらなければならない、そうでなければ本当の意味での良い結果には結びつかない、とよく言いました。「日々に新たなり」も多く語られた言葉です。毎日いろいろなことがあるけれど、次の日には気分を一新させ、新たな気持ちで前を向いて進んで行こうという趣旨です。

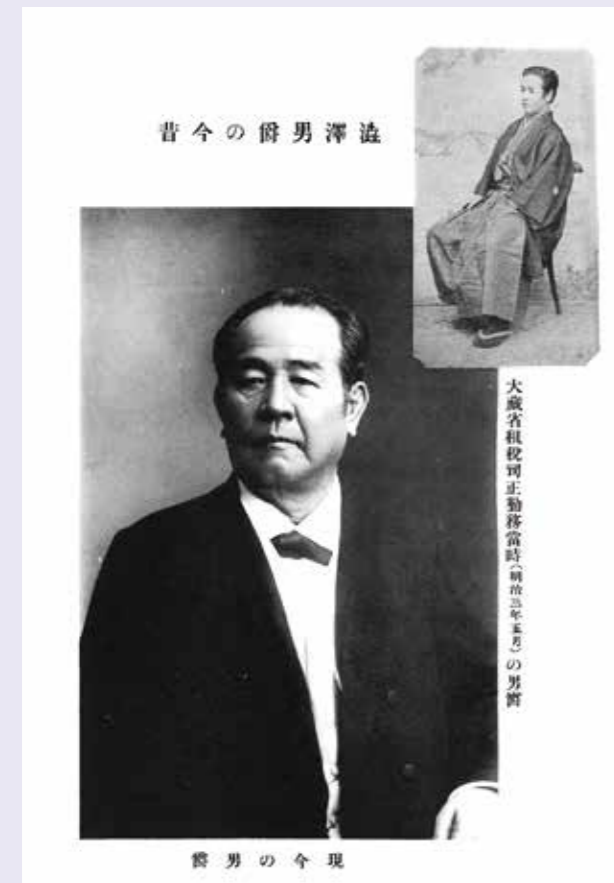
言葉だけを聞くと、「ごもっともです」とも言うべき、至極当然のことばかりです。では、なぜ当時も今も通用するのかと言えば、それが実践に置き換えられているか、日頃の生活の中で行われているかと呼び起こす言葉だからという気がしています。

栄一は、自分なりの明確なビジョンを持っていました。人に何かを伝える場面では、小さな目標を出すのではなく、それをやることによって、この世の中や皆の生活がこうなるんだという、先の明確なかたちを分かりやすく伝えてくれる人でもありました。しかも実体験に沿う話が多いため、理解しやすい。

(中略)

渋沢栄一は数多くの企業を育ててきました。長く続いている企業が多く、百年企業もいくつもあります。では、栄一の教えを皆が実践し、正しい道筋で順調に育ってきたかと言うと、全てがそうではないはず。栄一の理念や思い、考えがどのように受け継がれているかと言えば、やはり資本主義社会においては、利益を最優先に考えてしまうところがあるわけです。直るものが備わったほうが、間違っただ道に行かないと伝えようとしていました。それが冒頭で述べた、活字化することを好まなかったというエピソードにつながります。

人を育てることについても同様のことが言えます。渋沢栄一は、人を育てることを非常に意識していた人です。何年で次のステップを踏みなさい、決してそんなやり方ではなく、その人が活躍できる場がどこなのか、適材適所を意識し、本人にも自覚させてその道を進ませることの重要性を語っています。また、より高いポジションを目指す意識を持たせる言葉が、『青淵百話』にも多く含まれています。



澁澤男爵の今昔

## 澁澤栄一略歴

渋沢栄一は天保11年2月13日(西暦:1840年3月16日)、現在の埼玉県深谷市血洗島の農家に生まれました。

家業の畑作、藍玉の製造・販売、養蚕を手伝う一方、幼い頃から父に学問の手解きを受け、従兄弟の尾高惇忠から本格的に「論語」などを学びます。

「尊王攘夷」思想の影響を受けた栄一や従兄たちは、高崎城乗っ取りの計画を立てましたが中止し、京都へ向かいます。

郷里を離れた栄一は一橋慶喜に仕えることになり、一橋家の家政の改善などに実力を発揮し、次第に認められていきます。

栄一は27歳の時、15代将軍となった徳川慶喜の実弟・後の水戸藩主、徳川昭武に随行しパリの万国博覧会を見学するほか欧州諸国の実情を見聞し、先進諸国の社会の内情に広く通ずることができました。

明治維新となり欧州から帰国した栄一は、「商法会所」を静岡に設立、その後明治政府に招かれ大蔵省の一員として新しい国づくりに深く関わります。

1873(明治6)年に大蔵省を辞した後、栄一は一民間経済人として活動しました。そのスタートは「第一国立銀行」の総監役(後に頭取)でした。

栄一は第一国立銀行を拠点に、株式会社組織による企業の創設・育成に力を入れ、また、「道徳経済合一説」を説き続け、生涯に約500もの企業に関わったといわれています。

栄一は、約600の教育機関・社会公共事業の支援並びに民間外交に尽力し、多くの人々に惜しまれながら1931(昭和6)年11月11日、91歳の生涯を閉じました。

(出典:公益財団法人 渋沢栄一記念財団ホームページ)

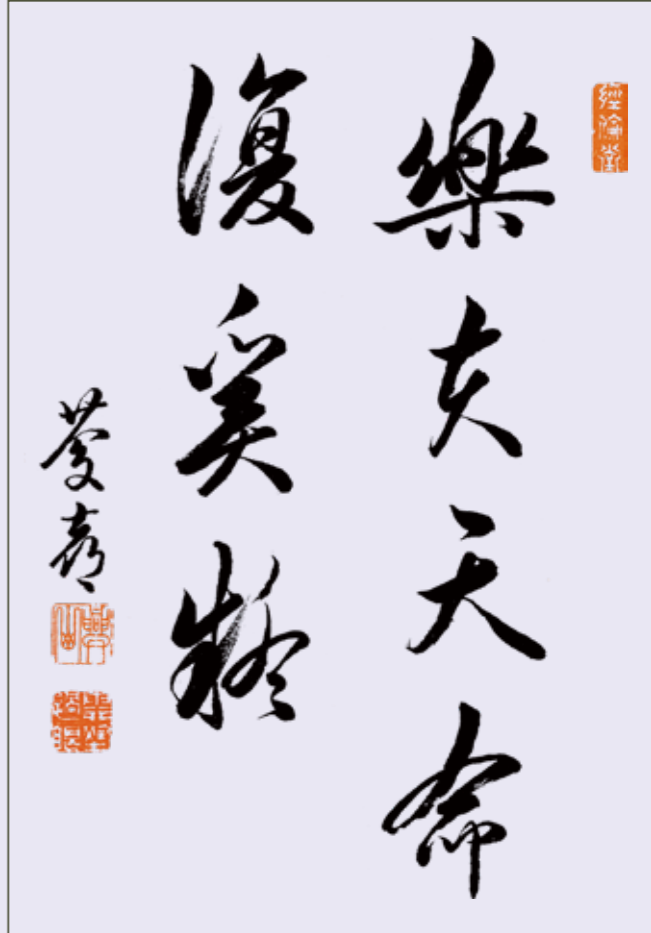
## 《乾》

- 1 天命論
- 2 人生観
- 3 國家
- 4 社会
- 5 道理
- 6 迷信
- 7 統一的大宗教
- 8 余が處世主義
- 9 公生涯と私生涯
- 10 天の使命
- 11 余が家訓
- 12 忠君愛國
- 13 言忠信に行篤敬
- 14 益友と損友
- 15 敬意と敬禮
- 16 一事一物も精神的たれ
- 17 眞誠の幸福
- 18 口舌は福禍の門
- 19 清濁併せ吞まざるの辨
- 20 實業界より見たる孔夫子
- 21 龍門社訓言
- 22 論語と算盤
- 23 論語主義と權利思想
- 24 米櫃演説
- 25 商業の眞意義
- 26 日本の商業道徳
- 27 武士道と實業
- 28 新時代の實業家に望む
- 29 事業経営に対する思想
- 30 企業家の心得
- 31 成功論
- 32 成敗を意とする勿れ
- 33 事業家と國家的觀念
- 34 富貴榮達と道徳
- 35 國家的觀念の權化カーネギー氏
- 36 危険思想の發生と實業家の覺悟
- 37 當來の労働問題
- 38 社會に對する富豪の義務
- 39 就職難善後策
- 40 地方繁榮策
- 41 立志の工夫
- 42 功名心
- 43 現代學生氣質
- 44 頽廢せし師弟の情誼
- 45 始めて世に立つ青年の心得
- 46 役に立つ青年
- 47 余が好む青年の性格
- 48 會社銀行員の必要的資格
- 49 明治の實業教育
- 50 女子高等教育論
- 51 女子教育の本領
- 52 理想的の妻たる資格
- 53 處女の覺悟
- 54 婚姻と男女交際
- 55 家庭
- 56 人生の慰安
- 57 娛樂
- 58 衣食住
- 59 貯蓄と貯蓄機關
- 60 交際の心得
- 61 人格の修養
- 62 精神修養と陽明學
- 63 常識の修養法
- 64 習慣性に就いて
- 65 大事と小事
- 66 意志の鍛鍊
- 67 克己心養成法

## 《坤》

- 68 元氣振興の急務
- 69 勇氣の養ひ方
- 70 健康維持策
- 71 服従と反抗
- 72 獨立自營
- 73 悲觀と樂觀
- 74 逆境處世法
- 75 白河樂翁公の犠牲的精神
- 76 無學成功の三友人
- 77 先輩と後輩
- 78 備者被備者の心得
- 79 過失の責め方
- 80 激務處理法
- 81 貧乏暇無しの説
- 82 讀書法
- 83 故郷に對する感想
- 84 忘れ難き兩先輩の親切
- 85 吾が生涯の悔恨事
- 86 米國漫遊の九十日間
- 87 老後の思ひ出
- 88 余が少年時代
- 89 立志出郷關
- 90 浪人生活
- 91 一橋家出仕
- 92 兵隊募集の苦心
- 93 産業獎勵と藩札發行
- 94 幕府出仕
- 95 外國行
- 96 歸朝と形勢の一變
- 97 静岡藩出仕と常平倉
- 98 明治政府出仕
- 99 在官中の事業
- 100 退官と建白書

附録  
澁澤青淵先生小傳／大澤正道編  
卷頭  
題辭／徳川慶喜公揮毫  
口絵  
一 澁澤男爵の今昔  
二 書齋に於ける青淵先生と青淵百話原稿  
三 澁澤男爵の筆跡(家訓處世接物の綱領七則)  
自序  
縮刷發行に就いて  
凡例



徳川慶喜公揮毫



書齋に於ける青淵先生と青淵百話原稿



王子邸園内愛蓮堂前に立てる青淵先生(左から森山同文館主、澁澤男爵、井口正之氏)